

かゑらじと かねて思へハ 梓弓
なき数に入る 名をぞとどむる
四條畷に散った若き武将、楠正行

楠正行通信 第4号

平成27年2月10日

発行＝四條畷楠正行の会

〒575-0021 四條畷市南野5丁目2番16号

四條畷市立教育文化センター内 072-878-0020

正行の生き様に影響を与えた北畠親房

「神皇正統記」「結城親朝宛書簡」に見る武家観・家門意識

公家優越・武家蔑視思想の持ち主

北畠親房は、永仁元年（1293）村上源氏の庶流に生まれ、延慶元年（1308）16歳で従三位に上がり公卿の座に列し、花園帝、後醍醐帝に仕えた後、世良親王の死去に伴い38歳で出家する。その後、奥州鎮守府将軍となった北畠頭家を補佐する名目で陸奥に下り東国経営を目指す。東国武士の南朝帰順に失敗し、興国4年（1343）吉野に戻る。北畠親房を知るうえで重要な史料と云える「神皇正統記」や結城親朝にあてたとされる70通にも及ぶ「書簡」は、この時、小田城や関城で書かれた。

関城、大宝城の落城に伴い、九死に一生を得て吉野に戻った北畠親房は、公家のトップ、後村上帝の後見役として吉野の宮を動かし、足利尊氏討伐・南朝復権の主戦論を主導する。そして、正当な帝の復権のためには足利尊氏との和睦も視野に動く和平論の正行との確執が始まるのである。

興国5年（1344）から正平3年（1348）の5年間は、河内の豪族上がりの正行にとって、公家優越・武家蔑視思想の持ち主、北畠親房の主戦論の前に抗しがたい苦難の時期を送ることとなり、その結果として、討死覚悟で、四條畷の戦いに臨むことになる。

おそらく、北畠親房は、四條畷の合戦を前に、「**正行よ。おまえは何をぐずぐずしているのか。そなたの父、正成は淡川において命を惜しまず忠節のかぎりを尽くしたではないか。父の死を恚怒にするのか。**」と、公家の威厳をかさに着た尊大で峻

烈な言葉を浴びせたことだろう。

身分の低い武将、楠正行は、楠家棟梁としての誇りを傷つけられ、怒りと恥辱に唇を噛んだに違いない、と井之元春義はその著「楠木氏三代」に記しているが、私もまったく同感である。

結城親朝を説くために書いた神皇正統記

では、北畠親房は神皇正統記を、いったい誰に向けて書いたのだろうか。

このことについて、日本古典文学大系月報に松本新八郎が「神皇正統記の童蒙」と題し、新説を提案している。

「神皇正統記」述作の目的を直接明らかにしてくれる材料は、最古の写本「白山本」（白山比咩神社蔵）の奥書にあり、「此記者、去延元四年秋、爲_レ示_二或童蒙_一所_レ馳_二老筆_一也」と記されている。



南朝の重臣・北畠親房公の墓所

この奥書によれば、親房は「童蒙」に示すため「神皇正統記」を執筆したことになる。では、この「童蒙」とはいったい誰なのか。

従来の定説では、この童蒙は後村上天皇を指し、勅命によって記したとされてきた。

しかし、松本新八郎は、「童蒙」とは「がんぜない子ども」といったニュアンスの表現であ

るから、いかに幼帝とはいえ、なぜこのような表現を用いたかは説明がつかなかったと、疑問を呈し、その解くカギを関城書に求めている。

松本新八郎は、関城書は結城親朝に送った70通余りの書簡の内容を総括して、親朝の父、結城宗広と、同じく

弟の結城親光の忠節にならえ、と訴えているとして、神皇正統記の「童蒙」というのは、結城親朝であって、結城宗広・結城親光の忠誠を讃えて味方に引き入れようとした親房執念の絶筆がこの書であったと思える、と続けている。

結果、神皇正統記は、東国の武士たちに対し、欲する官職を授ける唯一の正統の君主は南朝の天皇であること、官職は家柄と勲功とに応じて厳正に授けられるべきものであること、武士たちはまず南軍（親房）に味方して忠節を尽くさねばならないこと、これらの事を東国武士の中で抜群の家柄であった結城家に説くために記された、と解釈する。

わずか5年間に元の原稿が転々と転写された事実は、当時の世相を読み切ろうと、南朝に思いを寄せる東国の武士の間で、この神皇正統記がもてはやされたであろう状況が想像できる。

北畠親房の家門観

北畠親房の書状から、彼の家門観という考え方に注目した論文がある。同じく日本古典文学大系月報に寄せられた永原慶二の「北畠親房の書状」である。

永原慶二は、親房は伝統的な身分・家格を誰よりも重視し、門地の高さは天皇への忠誠義務の深さと表裏であらねばならないと考え、親房自身の村上源氏という家門に対する誇りは驚くべきもので、それ故、天皇への忠誠心も人一倍深くなければならないことを強く自覚し、自ら戒めもする、という。

そのような親房からすれば、東国武士の中で結城家が抜群の家柄であった。北畠親房は、結城家は「坂東において由緒他に異なり」と考え、その理由は、遠祖の興業（藤原秀郷のこと）と、結城親朝の父・宗広が「先朝の御時の非分の昇進」を受けようとしなかった折り目の正しさであった、と永原慶二は記す。

さらに、親房の目からすれば、結城家はいわば運命的に忠誠を貫かねばならぬ「家門」として映るのであって、そうした確信が70通にも及ぶ結城親朝への説得の文字になるのだ、と続けている。

挫折した親房は、策謀家へと変貌

政治は公家が行うものであり、武士はそのもとの軍事に限って奉公すべきものであった。公家と武家の身分・門地の上下ははっきりしている。後醍醐のように、その違いを無視して両者を同じように並び用いるのはそもそ

も間違いであり、そこに政治の混乱が起こるのは当然である、というのが親房の考えである。

五年にわたる東国経営の努力のすべてが水泡に帰す中で、あまりにも現実的で浅ましい東国武士の進退に失望した親房の心中には、武士への侮辱感がいよいよ高まっていたであろう。そして同時に、名門村上源氏の長者としての使命感と自負心とをいよいよ燃え上がらせていくのである。

このような危機意識と独善的と言っていいほどの自負心は、吉野に帰ってからはますます強まっていった。組織者として挫折した親房は、今や一種の策謀家へと変貌する。

正行を低く見た親房の家門観！

このように松本・永原二人の論文を見てくると、親房と正行の関係が浮き彫りになってくる。

公家優先・武家蔑視に加え、家門意識の強い親房にとって、河内の一豪族に過ぎない正成・正行は、武士にあっても最も低く見ていたことは間違いない。

建武の新政で正成を重用した後醍醐帝を批判するくらいであるから、推して知るべしで、間違っても正行を頼みにするというようなことはなかったのではないかな。

結城家は抜群の家柄であったが故に、数年にわたって翻意を促す書簡を送り続けたのである。

四條畷の戦いにおける若き武将、正行の悲劇の源泉は、まさに、ここに始まっていると思える。

北畠親房、「トイウモノ」を書き分け、序列化

北畠親房は、神皇正統記の中で、「トイウモノ」を書き分け、序列化を明確にしている。

最上位の系の神・皇には「ト申ス」「ト号ス」と最高の表現を用い、以下、「ト云王」が四例（インドとシナの王）、「ト云神」が十例（傍流の神に限る）、「ト云人」は鎌足など十七人と続く。そして、その下に武士を置き、楠木正成ら六人の武士は望ましい武士として「ト云者」、最下位に、将門など好ましからざる武士として「ト云物」と書き分けている。

神皇正統記の後醍醐天皇編に、「河内国二橋正成ト云者アリキ。」と、楠木正成に触れる件があるが、この「アリキ」には「追慕する心」が一応動いていることは事実で、単なる「アリ」よりも作者の感慨を込めた表現であるといえる、と日本古典文学大系・神皇正統記の脚注にある。

正行の悲哀が、こんな書き分けにも垣間見ることができる。

（文責：「四條畷楠正行の会」代表 扇谷 昭）